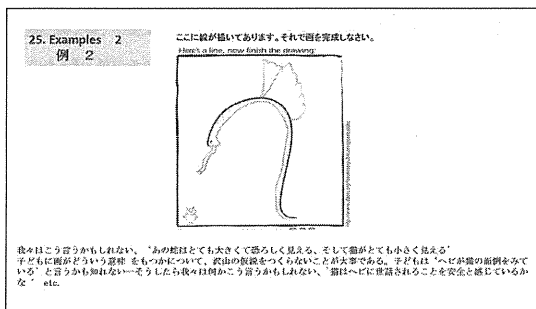


ものほうで、その絵を完成させるというゲームになっています。トラウマを受けた子どもたちが、こういった殴り描きのゲームを通して描く絵のなかに、子どもたちの何かを語る材料が出てくるかもしれません。子どもたちとの話のなかで、こういった遊び、若しくはお絵描きといったような馴染みのある活動のなかで何か引き出すことができるかもしれません。

たとえば、この絵ですが、「ちょっとこの人悲しそうだけど、どうしてだろう？」といったような声掛けができるかもしれません。例えば、子どもから「悲しそうなのは、お母さんがどこかに行ってしまったからだ」という答えが返ってくるかもしれません。

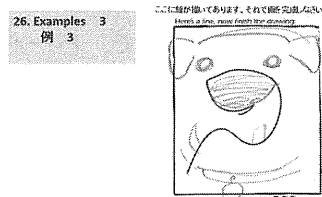
25に行きます。



こちらの絵ですが、子どもが、左下に小さな生き物を描き、その右上のほうに蛇の絵を描いています。こういった絵を見て、子どもたちがたとえば、虐待を受けた経験を示していたり、何かを語っている部分があるかもしれません。すぐに、そういった経験について触れるのではなくて「これはどういう意味なの？」といういくつかの質問を通して掘り下げていくことができます。たとえば、「この蛇は怖そうだね？」とか「どうしてこんなにこの猫ちっちゃくなっているのかな？」とかですね。ある程度子どもっぽい話をかわすかと思いますが、

我々の視点と、トラウマを受けた子どもたちの視点というのはかなり違う場合があります。例えば、子どもは「この蛇が猫のお世話をしているんだよ」と言うかもしれません。こういうテーマというのはよく見かけるものですが、この子どもにとっては、自分を傷付ける親が、一方で自分の世話をしてくれる人でもあるというのです。

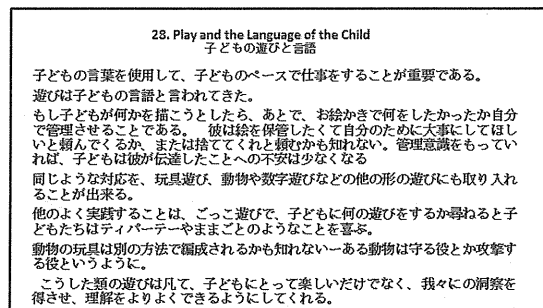
26に行きます。



我々は「太は何という大きな歯をもっているのだろう」と言うかも知れない。我々子どもがしゃべらないかも知れない時には、話し合うことをあまり気にする必要はない—友にかの歯を描く行為はそれ自身がコミュニケーションの形で、しばしば無意識に、子どもにとってただ歯を描くことが役立つのである。

子どもたちが描く絵は、時々、こういった怖い顔をしていたり、恐ろしい表情をしていたり、この犬なのですけれども、かなり歯を剥き出している感じになっていますね。これは、日常生活のなかでも、普段の遊びを通してとか、普通にやっていただけることと思います。皆さんがセラピストである必要はないのです。子どもたちにとっては、こういう自己表現ができること自体が大変助けになることもあります。

それでは、28に進んで行きます。

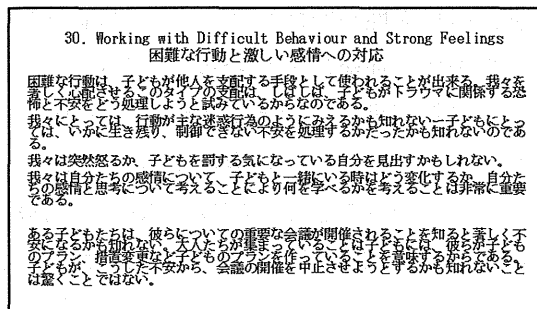


遊び自体が、子どもにとっての言語であるというとらえ方があります。それほど多

くのもは要しないのですが、子どもたちが遊べるような道具、ゲームとか玩具とか紙とか、ペンとか何か書けるものなどそういったものを用意して遊べるような環境を整えてあげられればと思います。子どものなかには、施設に入所する前に、本当の意味での遊びを知らない子どもたちがいます。本当にストレスを受け過ぎていて、リラックスして遊ぶことさえできない子どもたちもいます。ですから、トラウマを受けた子どもたちと向き合っていくためには、大人と一緒に子どもと遊んであげる、遊び方を教えてあげるということも大事になってきます。ゲームを一緒にしたり、お絵描きを一緒にしてあげるといった経験も重要なのです。次29ですね。



Albert Einstein ですが、「遊びが研究の一番高度な形態である」という言葉を残しています。次30です。



また、重要な点としては、私たち自身の感情の動きにも注意を払うということです。我々も、時とともに気持ちが揺れ動いたり、

違う子どもと接しているときには違った感情を抱いたり、徐々に感情の変化がありますので、そこにしっかり目を向けるということも重要です。

大人同士がときにチームを組んで、施設のなかで一緒に仕事をしたり、また、里親同士の方が、ご自身の感情的なところを、どういう気持ちで子どもと接しているのかを共有していただくということが重要になってきます。

私が対応したなかで最も大変な子どものひとりに7歳の子がいたのですが、その子とすると本当にみんながその子を殺したくなるような大変な子どもでした。本当にこれは極端な例だったのですけれども、周りの大人たちも、非常にこの子に対してはとても強いネガティブな感情を抱くような子どもだったの

です。その子も、あえて周りにそういう感情を起こさせるような行動ばかりを常時取っておりましたので。本当にネガティブに、その子に対して、周りの大人たちもなっていたのです。ですから、ほとんど同じような状況が1年ほど続きまして、毎日毎日それほど変化も見られない状況で、我々は、そんななかでも最善を尽くして、一緒に何とか話し合いをしながら、あまり反応しないように、できる限り世話は続けて、安全な形で、その子を見守ろうという状況が続いていました。

ここまでのところ、何かご質問のある方いらっしゃいますか？

渡邊総括園長：よろしいですか。先ほど21番のスライドで、定着性をおっしゃってました。私が今、六十何年調布学園に

いるのも「辞めないでね」と言われたことが六十何年勤続の原因になったということで、うちの職員にも定着してもらうことが大事です。辞めないで、明日もまた、子どもと一緒に過ごしてくれる職員であって欲しいです。そして、次の日もまた一緒に過ごして欲しい、そういうことをさっきおっしゃっていただいたので、大変先生のご苦労と同じような考え方で進んできてよかったなという思いを持っております。質問というより感想です。

トムリンソン：今おっしゃっていただいたポイントは、非常に重要な点だと思います。我々の仕事の中で最も重要かつ難しい点というのは、いかに職員の方に定着していただけるかです。そういった環境や、文化を作り上げて、お互いを支えていける地盤を作るといことが非常に重要な仕事であると思っています。

我々のような仕事をしている組織の定着率をいかに維持するかということは、本当に子ども苦労している点だと思います。

改善の術としては、十分な時間と資源を割くということですが、どうしても時間的な制約がひとつの課題になってきます。

子どもたちの世話に充てる時間と、スタッフ同士がお互いに支え合うための、チームとしてのケアをする時間にはどうしてもお互いに相反するところがありますので。そこが時間的制約という点で、難しい点かと思っています。ただ、あくまでも、そこまで追加的に時間を割かなくても、与えられた時間のなかで、お互いにいろんなことを話し合うことができれば、かなりストレスの軽減につながるかと思っています。例えば、正

直に、オープンな形でお互いの経験を語り合うような、そういった時間が持てれば、大変お互いにとっていい関係づくりになるかと思います。

ほかに何かございますか？この点についても結構ですし、ほかの点についても結構です。

男性：先ほど出た7歳の子の事例について、簡単に生い立ちと、職員の具体的な問題、あるいは、周りの子へのフォローを、どんなことをやったのかを教えていただければ。

トムリンソン：先ほどお話しした7歳の男の子は、本当に花火のように、次から次へと飛び回っているような、多動で、活動的過ぎるぐらいの、常に周りの子どもと問題を起こすようなタイプの子どもでした。その施設を逃げ出したりとか、全く落ち着いたところが見られないような子どもで、短時間ゲームしたり、遊びに終始することもあったのですが、次の瞬間には逃げ出してしまうという、全く落ち着きのない子でした。彼の生い立ちをお話すると、実の父親とは接触がないということで、母親にいろんなボーイフレンドとか、いろんな関係を持った男性がいたわけですが、母親とは、この子は、連絡は取り合っている状況でした。母親が世話をできる状況ではなかったということで、彼の安全性にも懸念が生じていたということで、施設に入所した経緯があります。最も難しい状況であったのは、子どもが母親と連絡を取り合っている状況のなかで、母親がいつもいろんな約束をしていたのですね。例えば「会いに行くよ」とか「これをあげるよ」とか、それに対し

て子どもは本当に大喜びで信じて待っていたわけなのですから。一切この母親は約束を守らずに、いつも子どもががっかりするような状況が続いていたのです。母親が約束を破ると、彼は激怒していたのですが、一方では母親のことは、いい母親だと信じたい、守りたいということで、母親に直接その怒りを表現することはできなかつたのです。ということで、周りにその怒りが向いてきたという状況だったわけです。

この子に関して、正直、我々もうまく対処できたとは思っていません。非常に難しい状況のなかで、我々は、その子が、本当の自分の感情と向き合えるようになるように仕向けようとしたわけなのですから。つまり、母親に対する感情をちゃんと表現できるように、悲しければ、その悲しい気持ちを、怒りであれば、怒りと向き合えるような状況に持って行きたかったのですけれども残念ながら、そこには至らなかったケースになると思います。ですから、自分自身の悲しみや、怒り、抑鬱的な感情に、彼がちゃんと向き合って、戦って、ちゃんとそれを表現できるような状況にはいかなかったと言えます。

開原：殺したくなるほど大変だったということは何ですか？

トムリンソン：そうですね。私も、ここまで周りの子を怒らせるといいますか、怒りの感情を巻き起こさせるような子どもというのは、ほかに思い付かないぐらいの子だったのですけれども。大人に対しても矛先を向けて、ターゲットを絞って、怒りをか

き立てるような行動に出ることもありました。チームのメンバーも、非常にその子に対して嫌な感情を持っていたので、自分の仕事で、ここまで子どもに対して否定的な感情を持つこと自体が、本当に仕事上、この仕事に向いていないと思わせるほど大変困難な子どもだったわけなのですから。全員がそういう気持ちを持つほどの状況にあったということです。イギリスでは英語の表現で、よく、殺したくなるか、首を絞めたくなるかという言い方がありますが、言葉どおりではなく、そこまでの感情を抱かせるほどの、周りの大人全員がそういう感情になるほどの子どもであったということです。ほかに、あまりそういう例はないですね。

ほかに何かありますか？

男性：日本でも同じように、そうやって職員を逆なでするとか、ほかの子を逆なでするといふ子どもが見受けられることがあります。それでも、トムリンソン先生は、その子のそういう出方に、一回一回向き合って、そういう出方はおかしいよという対応をされてきたのですか。あとは、子ども自身が大人に言われて、人と距離を置かれると、子どもにとってはショックというか、大人は大人で、心の気持ちを、「そこはおかしいよ」と伝えることを続けたほうがいいのか。大人は、そういうのを無視してしまうという対応のほうがいいのか。

トムリンソン：そういう行動を取り続けることはだめだと、受け入れられないことなのだということを伝えていくということは重要だと思います。期待値をどこに持って

いくのかということになるのですけれども、安全でない行動ですとか、そういう問題行動を起こした時には、ほかの子どもたちが不安に思うことを、もしかしたらストレスに感じるという行動である場合もあるかと思えますので、それはちゃんと行動としてコントロールできるようにしていかななくてはいけない、それはやはり伝えていくべきだと思います。これを、何度も同じことではあるのですけれども、一貫して、それをやってはいけないよと伝え続けていく。それを明らかにしていくということも重要です。あと、難しい点というのは、その施設のなかで、そういう問題行動を起こせば大人の注意を引けるのだということを植え付けられないということも重要なのですね。ほかの子どもたちもそれを見ているので、こういうふうの問題を起こせばみんなに注目してもらえるのだなと思われてしまうと困るわけなので。問題行動に報酬を与えないということも重要ですし、一方でプラスの行動に関しても、ちゃんとそれを報いるような、注目をしてあげるということも重要になってきます。子どもの感情の持って行き方に関して、たとえば、誰かを殴りたいと言葉で言うことは、実際にそれを行動に移すよりもいいわけなのです。言葉で表現できるようになるということが、我々の目的として狙っているところでもあります。ただ、子どもによっては、それを言葉として表現する、誰かに暴力をふるいたいのだという気持ちを言葉にできずに逆に行動に出てしまう子どももいますので。言葉で表現をさせてあげる、そこができるようになるということも、ひとつの目指しているところではあります。

非常に目覚ましい改善があったケースもあります。14歳の男の子でしたが、非常に体も大きくて、ある時、私にとっても怒っていた時期がありました。隣にきてこぶしをかざして、「ありんこのようにつぶしてやりたい」と言われたこともありましたが、私は、その場で動かずに、結果的には彼は私を殴ることもなかったのですけれども。非常に難しい子どもではあったのですが、逆に実際に殴るという行動に出ずに、言葉でそれを表現することができたということは、彼にとっての進歩だったわけです。

彼が子どもの頃、もっと小さいときに、自分よりも大きい人たちが、彼をどういふふうに扱ったのか、そのときの感情も言葉で表現することができるようになりました。

それでは、ここで10分間の休憩を取りたいと思います。ここまでの私の話が、皆さんが今、世話をされている子どもたちに関連性のあるお話であればと願っております。

後半部分で何かご質問等ございましたら、具体例を含めて質疑させていただければと思います。それでは、ここで一旦10分間休憩を取ります。

(10分休憩)

トムリンソン：それでは、33から再開したいと思います。

33. Helping Traumatized Children Communicate with Words 2
続き トラウマを背負う子どもたちに言葉の交流の支援

もし子どもが怒っているように振る舞ったら、我々は彼にその感情に名前をつけるのを手助けすることが出来る。
「あなたが」のように振る舞う時は、あなたは怒っているのかどうか不思議だ。または、「あなたは今日、怒っているように見える」

「私はあなたのことについて考えたから、眠ってやりたい」というように物事を話し始めることが出来る子どもは、善い進歩をしている。

我々は、子どもに物事を理解し感情と行動を管理する責任をとりはじめるのを助けることが出来る。時々、彼らは怒り、怒った時大人が怒りを示したことを思い出して、あのことが起こらないようにしようと試みることが出来る。

我々は、子どもたちに言葉で伝えることの自信を持たせる支援を近山明尊する必要があります。たとえもし、もし子どもが他の子どもを怒らせたならばあなたが怒らざるを得ないのを絶対許さない、と言いつつ出来る。

話をし、言葉を通じての交流というのが、人間としての発達過程において最も重要な部分であるかと思えます。ここ10年ほどの間、いろんな研究が進んできており、親の影響によって、脳の発達にどういった影響が出るのかということが、次第にわかってきました。会話の豊富な家庭に育った子どもは、特に自分の感情についても、これが楽しかったとか、嬉しかったとか、面白かったとか、感情について親がよく話をする家庭であれば、より子どもにとっては、長期的にいろんな意味での達成能力が高かったり、友人とも長期的に良い関係が築けたりとか、プラス面の影響が多いということがわかっています。

また、リサーチに関して言えば、脳の研究の中で実証されている内容というのは、子ども同士がうまく遊んだり、お互いにいろんな話をしたり、仲良くできるということが、将来的に非常にプラスの影響を出してくるということで、resilience、回復力という意味でプラスの効果があるということがわかっています。仲間との関係、友達同士の関係というのは、非常に長期的な結果として、将来を占うという意味で、長期的な今後の発達を占う指標にもなっております。周りとは仲良くできない子どものほうが、犯罪者になる確率も高いですし、学校を中退してしまったり、若しくは学業から

ドロップアウトしてしまったり、また、職に就けなくなってしまう可能性も高くなってしまいます。一方で、非常に周りとは良い関係を作ることができる子どもは、長期的に見ても非常にプラスの結果につながりやすいということがわかっています。

施設に入所している子どもたちを、グループとして見ていると、非常に子どもたちの関係自体も難しいなと感じざるを得ません。ですから、みんなで仲良くできるようにということで、手助けをしながら、非常に難しい局面も多々ありますが、数名のグループで施設に入所している子どもたちが毎日顔を突き合わせているわけですから、できる限りみんなが仲良くできるような環境を整えてあげることが重要になってきますし、お互いを許容し合って一緒に遊んだり、お互いに耳を傾けたりすることが大変助けになると思います。

私がこれまで仕事をしたなかで、トーキング・グループというのを、バーバラ先生の提唱で始めた経緯があります。

44. Talking Groups
話し合いのグループ

私が働いていた治療的コミュニティでは、3〜4人の子どものグループが30分間大人とただなんでもしゃべりたいことを（道徳にかなった枠内で）話し合いグループを持っていた。

このことは、大きなグループでは話をするのが困難とわかっている子どもたちに特に役立っていた。

あるグループでは、男の子たちの一人が「ティディベアのしゃべるグループ」を提案した。

これは、遊びの中で象徴的なコミュニケーションを提供する機会となり、大変独創的な考えであることがわかった。

3名の子どもたちに対して1名の大人が付くような形で30分間ほどただひたすら話をします。大人の役割は、子どもたちの会話がうまくいくように時々サポートをするという役割だったのですが、子どもによっては、話をすること自体が困難な場合も

ありますので、ただ話をしてもらおう場を設けるという意味もあったわけです。

男の子で、自分は話をするのが嫌いだと言っていた子どもがいましたが、テディベアという熊の縫いぐるみを通してお話をしようということで、テディ・トークグループというのを作り、テディベアを通じて話をさせることにしましたら、それだったらいいよというグループもありました。いろんなクリエイティブなやり方が考えられると思いますので、何とか子どもたちに話をさせるために、いかに関与させるかというところで、いろんなやり方が考えられるかと思っています。それぞれの子どもがどういう発達段階にあるのかということも考慮する必要があります。また、子どもたちをグループのなかに配置するとき、本当に正しいグループ構成になっているのかどうか、適材適所になっているのかどうかを考える必要があります。例えば、子どもが機能的には3歳程度の幼児の機能しか果たしていないのに、ほかのグループのメンバーはより発達段階が進んでいる場合ですね。本当にこの構成でいいのかということをお問いただければなりません。それぞれの子どもの発達段階において、どのステージにあるのかという、その子の個々の評価をしていかななくてはいけないわけです。コミュニケーションに関して、それぞれの子どもと話をするなかで、いろんなレベルのコミュニケーションがあるので、その子とはどういふふうにコミュニケーションを取るべきなのかと考えていかななくてはいけないわけです。子どもたちで、言葉は発していますが、たとえばテレビを見るとか、時間はそこでいろんな話で埋まっているということがあ

かもしれません。本当に自分たちのことを語っているかということ、そうではないのです。自分たちの感情は何も表現していなかったり、何も実質的なコミュニケーションが取られていないという場合もあるかと思っています。我々は、子どもたちにはもちろん伝えなかったのですが、子どもたちのスコアを付けていたことがありました。Cという評価であれば、単にそういう言葉は交わす程度であると。Bであれば、重要なことであれば話をするけれども、自分たちの感情については話をしないというレベルです。Aであれば、重要な話もするし、自分たちの感情についても表現するというのが、Aレベルということだったのです。子どもには知らせずに、職員の間でそういう情報を共有しました。それをモニタリングして、子どもたちのコミュニケーションが、半年ごとにどういふふうに変わってきたのかということを見ていくこともできました。それを測定していくこと、位置付けていくことが重要だと思いますので、子どもたちをよく観察して、何とかコミュニケーションの改善を図り、コミュニケーションの質を高めるという意味で、グループのなかでのコミュニケーションのやり方を考えていくことをやりました。

ここまでのところで、ご質問は？

女性：6人のグループホームで仕事をしているのですが、小学生が人の感情を思いやる、状況を読むというのが非常に苦手な小学生集団で、日常的にトラブルやいざこざが多くなっています。そこを改善したくて、先ほどから話題になっているトーキング・グループ、グループで話をするのを10月

からやっています。目的は、感情を気遣うことだったり、評価をするということを得得して欲しいということだったりですが、現段階では、一日何をやって楽しかった？とか、自分の経験を、こういことして楽しかったということ、30分ぐらい時間を使いながら、大人と子どもで話をするということをしてしています。今の子どもたちの現状では、その取り組みがやとなのです。しばらく大人で毎晩そういう取り組みをしてみて、少し子どもの中で変化が見られたり、人の気持ちを考えたりできるような雰囲気が出てきたら、例えば、セカンド・ステップのような、先ほどのスクリブルのように、「この子は悲しそうだね」とか「悲しそうな子どもを見たら、どうい声掛けをしたらいいかね」ということを、ゆくゆくはやりたいという話をしているところ。子どもたちの、どのような状況の変化を見て、次の段階の話し合いに入れがいいのかということをご質問したいのですが。

トムリンソン先生：難しいご質問で、うまくお答えできるかわからないですが。やはり、非常にネガティブな経験をした子どもたちというのは、事実として、非常に思いやりの気持ちを持ったり、感情移入をほかの人たちにするというのが非常に難しいということもわかっているのです。特に、小さい頃にそういう経験をした子どもが、早期に、いきなり思いやりの感情を持ったり、感情移入ができる子どもになるというのは難しいと思います。これまで、文献でも目にしたことがありますけれども、こういう、ほかの人の感情を理解して、感情移入がで

きるような性質というのは、大人になって健康的な活動をするうえでも、最も重要な資質の一つであるということが書かれています。攻撃的・敵対的な人物になるのではなくて、ちゃんと社会行動をしていくために非常に重要な資質であるということを目にしたことがあります。子どもたちが、感情移入を経験しなければ、それがどういうものなのかということを得得できませんので。子どもたちにとって、私たちが思いやりを示してあげる、その子の気持ちに立って、何か行動に移してあげるということで、徐々に子どもたちもそういった気持ちを体得していくのだと思います。先ほど、そういったトーキング・グループの試みをされているというお話だったのですが、子どもたちに重要な話をしてもらうことが難しいと感じられることもあるかと思。けれども安全な話題で、そういったグループを続けていければ、6か月とか、もっと長くかかってしまうかもしれませんが、徐々に重要な話にも、子どもたちが口を開いてくるかもしれないと思います。

先ほどおしゃっていたご質問のなかの、次のステップ、セカンド・ステップというのはどういう意味でおっしゃっているのでしょうか。

開原：そういう名前のパッケージがあるのです。米国のCFC（Committee For Children）の日本支部が発行している米国の教育プログラムです。ご質問の方は、このセカンド・ステップを応用してトーキング・グループをやっておられるのですか？

女性：やっていないです。そこを目指した

いのですが、まだそういう段階じゃないので、楽しいお話をみんなで聞こうね、というところですよ。

トムリンソン：今、お話のあった「セカンド・ステップ」を存じ上げないのですが、いずれにしても、子どもがあるレベルから次のレベルに進んで行くところを手助けするというところで、何とか前に進んで欲しいというところのサポートについてのお話かと思えます。そういう意味では忍耐強く、子どもによっては、そう簡単にセカンド・ステップまで進むことができない子どもたちもいるかと思えますので。そこをいかに可能にしていくのかというところでは、忍耐強く待つ姿勢というのが非常に重要だと思いますし、次のステージにいつ行くことができるのかということを見守ってあげることが重要かと思えます。

先ほど、思いやりの気持ちといいますか、感情移入するという能力が、子どもたちのやりとりのなかでも最も重要な資質になるかと思えますので。そういう意味で、本当に子どもの気持ちがわかるということが、その必要性についてまず認識をする必要がありますし、子どもがどういう気持ちでいるのかということを知ることが必要になってきます。

親としては、子どもについて、いろいろと自然に気付きがあるかと思えます。たとえば2歳の子どもの対して、それから、10歳の子どもの対して、当然親の期待値も違うかと思えます。私も自分の息子が3歳の頃のことを思い出して、小さなハムスターを飼っていたのですけれども、階段を上がって行って、浴室の水を貯めて、ハムス

ターを泳がせようとしていたことがありました。3歳だったので、そこまで心配はしなかったのですけれども、私も「あまりハムスターは泳ぐのが好きじゃないと思うよ」という形で説明をしましたが、これがもし10歳だったら、ちょっと心配しなくてはいけない状況かもしれません。ですから、年齢によっても違ったりえ方がありますし、そのところをしっかりと見ていかなくてはなりません。子どもがどういうレベルにあって、どういう考えを持って、どういう行動に出ているのか、というところをしっかりと評価して、測定していくということが重要になってきます。そこで、どの程度の進捗があるのか、どのくらい進歩しているのかということを知り、しっかりと把握することができるかと思えます。

先ほどのお話と結び付いてくるのですが、スタッフの方々の定着についてもお話が出ましたが、やはり、職員の方、ケアをされる方々がいかに思いやりを持って、お互いの感情を押し量ることができるか、子どもに対しても、それを示すことができれば、子ども自体も感情移入をする能力をさらに高めていくことができ、経験としてできるかと思えますし、皆さんの感情についても、理解を深めることができるかと思えます。また、同僚の方同士の思いやりといいますか、お互いを察してケアをし合うということも、職員の方の定着率の向上にもつながってくるかと思えますので、一連の話がそれぞれつながっているかと思えます。

職員の方のケアというのも非常に重要になってくるかと思えますし、John Bowlbyの言葉だと思いますが、子どもを大事にするには、子どもの親を大事にしなくてははい

けないということにも通じると思います。

ここにいらっしゃる方のほとんどは、実際に施設で職員としてケアをされている方、若しくは里親として子どもたちのお世話をされている方がほとんどかと思いますが、皆さん、あまりこの仕事の重要性を十分に認識されていないこともあるかと思いますが、しかし、親として治療する、therapeuticな結果をもたらすということは、非常に重要な仕事の一環であります。ですから、こういうケアをしている施設の職員の方は、本当に重要な仕事をしているのだということをごきちんと認知させる必要があると思います。

それでは、次に、セラピー、それから、ライフ・ストーリー・ワークについて少し触れていきます。

ここにいらっしゃる方のなかで、セラピストのところに子どもが通っているという方がおられますか？（多数挙手）ということ、結構一般的に子どもがセラピーを受けている状況があるということだと思います。もちろん、子どもたちの年齢に合わせて、セラピーのテクニックも変わってくるかと思えます。お話をするとか、プレイセラピーとか、箱庭療法とかがあるかと思えます。子どもたちに、セラピーを受けさせるかどうかという意思決定は、回復のためにセラピーが必要かどうかということになりますが、子どもにとっては、治療的ケアもセラピーもライフ・ストーリー・ワークも大変役に立つものであることがあります。やはり、それぞれの子どものと、どういうふうに対応していくのかという、個々のケースとして評価していくことが重要になるかと思えますし、セラピー又はライフ・ストーリ

ー・ワークということで、子どもにとっては大変効果的な場合もあります。ライフ・ストーリー・ワークは、自分自身の生い立ちに関して非常に混乱している子どもにとっては大変役に立つ手法です。施設に入所する子どもたちのなかには、親元から離れて入所したケースもあれば、いろいろな変遷を経て、複雑な環境のなかで、いろいろなところを辿って最終的に入所したケースと様々だと思います。

ここで、一点、resilienceの話をしたのですが、いかに子どもの回復力を高めていくことができるのかというポイントについて、話したいと思います。

（以下のスライドは資料「エビデンス情報と成果にもとづいた里親のケアモデル」から）

17. Resilience 回復力

絶えず創りに心を開いてくれる大人の存在は 人生早期に心身を害する状況に屈服していたであろう子どもたちに、きわめて元気づける影響をもたらす。レジリエンスという考え方は、子どもの発達や、発達に混乱を伴った子どもたちがどう回復するかの理解の中心となっている。

社会的養護を受けるまでに多くの子どもたちは無数の危険因子に曝されている。子どものレジリエンスに基づく仕事は、子どもが持つ力と肯定的な面の確認に焦点をあてる。

ギリガン (Gilligan 2000) は、レジリエンスの3つの源を、安全基地、自尊心、自己治癒力と特定している。

教育の成功は、子どもたちに逆境の体験を克服し、レジリエンスを強めるという最も明確な方法のひとつとなることが出来る。独立した生活に移行する前の教育の成功は、明確な成果と相関することが明らかにされている。

18. The following key points have been found to promote resilience
下記の要点がレジリエンスを強める

- 強力な社会的支援ネットワーク
- 少なくとも一人の無条件で支えてくれる親や親の代理の存在
- 確実な学校体験 - 子どもが教育の達成を支えることは、長期にわたりレジリエンスと確実な成果をもたらす上に大変重要
- 笑顔する気持ちと自らの努力が強いを生み出すという信念
- 様々な環境活動の参加
- 破壊的な影響ばかりでなく有益なことも認識されるように、逆境を積み替える能力
- 他人を助けることで“強い”が生じる”能力と機会
- 挑戦的な状況からは避難するより、むしろうまく処理する力が育つように支える

そうした活動には下記のことが含まれる

- 動物の世話をする
- スポーツや他の余暇活動
- 表現と創作芸術
- アルバイトやボランティア活動

社会的養護の活動は、その中に含まれる利他的活動だけでなく人間関係の能力を築くのにも役立つ。そうした活動は、正常な生活をもたらし、アンリグ (Angrin 2002) は社会的養護下にある子どもたちに大変重要であることを見出している。

先ほども、コミュニケーションの重要性についてお話しましたが、よりコミュニケーションを円滑に取ることができれば、それは回復力の向上にもつながるということで、うまくコミュニケーションを取ることができれば、それだけ問題も少なく

なってくるということが言えます。

また、回復力を高めるもうひとつのやり方として、先ほども申し上げたように、ゲームをしたり、得意なことをやるとか、上手にできるとか、これをするのは好きとか、そういった意味でのアイデンティティーを確立することができれば、こちらも回復力向上につながっていきます。

また、もうひとつ、resilience という意味では、仲間同士、子どもたちのなかでも仲良くできるという、そういう関係構築ができれば、こちらも回復につながってきます。

ライフ・ストーリー・ワークも、子どもの回復という意味で非常に重要な役割を果たしておりますし、子ども自身のアイデンティティー、それから生い立ちを追っていくということで、そういった意味での回復力の向上につながってきます。ライフ・ストーリー・ワークということで、毎日の日常生活のなかで、本当に些細なことでも、子どもとのお話のなかで、過去の生い立ちに触れる機会があるかもしれません。たとえば、昔どこに住んでいた？とか、そういう話が出たときに、更に一步踏み込んでいろんな話を引き出していくチャンスが出て来るかもしれません。

以前、伺ったことで、日本では施設職員や里親は、子どもの生い立ちについての情報を殆ど得ることができないこと、子どもがどういう経緯で入って来たのかというくわしい情報がわからない状況が多いというお話でしたが、これをどうやって改善すればいいのかわかりませんが、ライフ・ストーリー・ワークというのは、子どものこれまでの歴史について知る過程の中でそう

いった情報を知るひとつのきっかけにはなると思います。

これについて、何かご質問ございますか？

女性：さっきの項目のところに戻ってしまうのですが、先ほどのグループで話をするというところですか。私たちのグループホームは6人の構成ですが、本当になかなか人への思いやりとか共感を持ちづらい集団で、本当に一人ひとりが自分のことを見て欲しいという気持ちがまだ、年齢的なところと生い立ちから強いのですが、そういう集団でも、まずは二者間の、職員との愛着を築くことを優先したほうがいいのか、それとも、やはりグループで話し合うということが重要なのか、教えていただければと思います。

トムリンソン：非常に興味深いご質問いただきまして、ありがとうございます。やはり、子どもたちがまだ、あまり思いやりの気持ちとか感情移入をする能力がない場合に、先ほどおっしゃったように、個々の、自分個人を注目をして欲しいというニーズがまだあるということだと思います。やはり、普通の子どもの場合、小さいときは、一対一で常にアテンションがもらえる、注意を傾けてもらえるという状況から出発しますので。そういう意味では、グループとして取り組むのはチャレンジであるかと思います。トラウマを負って施設に入所してくる子どもたちのほとんどは、まず、大人との間での愛着形成といったものが必要になってくると思います。その後のいかなる健康的な発達というの、まずは、そういっ

た愛着がベースにあって初めて形成されるものになると思います。ですから、まず最初は、子どもたちの個々の理解を深めて、早期の段階の、まだ発達の初期の段階であるということであれば、一対一の関係でのワークを多く取り入れて、若干のグループワークみたいなものを取りこんでいくことです。徐々に発達の進歩が見られて、徐々に改善されてきたという段階で、よりグループワークのほうの割合を増やしていったほうがよろしいかと思えます。

いろいろなご質問を受けておりますが、本当に皆さん、ご自身のお仕事に真摯に取り組んでらっしゃるなということが伝わってきますし、一方で現実が複雑な状況にあるということもお察しいたします。

コミュニケーションのお話も先ほどから出てきておりますけれども、こういったいろいろなご質問を受けて、ディスカッションに関しても、いかにコミュニケーションを取ることが重要かということも先ほどからお話ししているとおりなのですが。解決策を見つけるためには、大人同士のコミュニケーションというのが必須です。

ライフ・ストーリー・ワークについては、以上でよろしいでしょうか？

開原：今、講義で使われたスライドのなかで、resilienceに関係したものは、皆さんにお配りした資料にはなかったものです。それから、ライフ・ストーリー・ワークに関しては、去年、関連した資料をお配りしました。そのなかの重点を今回もう一度お話しくさいましたが、あと、英語のスライドがありますので補足していただきます。


ライフ・ストーリー・ワークで、ウォールペーパーという、壁紙にいろいろなことを書いたり、貼り付けるというお話を昨年講義していただきましたが、壁紙のイメージがどんなものかということで用意いたしました。

How do we work together?

We won't start Life Story straight away, as we need to get to know each other, that means we can play some games and begin to think about the feelings we have and how we can talk about them.

When we start Life Story, we can meet every other week with your main carer. We will meet on the same day at the same time, in the same place so that we can become confident that the meetings will happen.

In Life Story we can work on wallpaper, this can be rolled out for every session and rolled away at the end. We also have lots of art materials that can be used to help tell your story on the wallpaper.



トムリンソン：ご質問、ございますか？

女性：ライフ・ストーリー・ワークということについてですが、仕事のなかで、子どもの生い立ちの振り返りという形で、私たちができる範囲で取り組むということ、それなりにやっているのですが。ライフ・ストーリー・ワークを行う人は、51番のなかで、セラピストの場合と同じように、治療親の仕事とは兼務しないことが大事であるという一文がありますね。

51. Continued... The Benefit of Life Story Work 2
ライフストーリーワーク (LSW) の恩恵...

ライフストーリーワーカーはその仕事の詳細についての研修を受けるが、セラピストの場合と同じように治療親の仕事と兼務しないことが大事である。

セラピーと同じように、ある子どもたちは別の場所で物事に取り組み、分離したことにより恩恵を受けるのである。

LSWの典型例は、1~2週間に1回、面談が行われ、ふつう、1年から18か月の間に終結する。

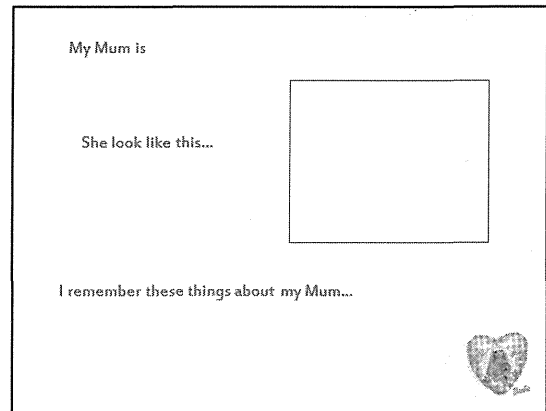
最後には、子どもは自分のLSWを所持し、それは彼らの生育歴の重要な記録として役に立つのである。

セラピーを行う人については、今の日本の養護施設のなかでは専門職として各施設に配置されたり、業界の中で専門家として

認識されるようになってはいるのですが。ライフ・ストーリー・ワークを行う人という専門家は日本では、まだ認識されていないし、そういう仕事として確立されていないという実態があります。そういうなかで兼務をしないということが大事であるということは今の日本の養護の現状と重ならないので、どう認識をしていけばいいのか。たとえば、治療親が取り組むというライフ・ストーリー・ワークの取り組み方しか、現実的にはできないので、どうしたらいいか、ということを知りたいです。

トムリンソン：自らの生い立ちに関して、若しくはアイデンティティーとか、自分の家族はどこにいるのだろうかということに関して、子ども自身が混乱しているような場合、そんなに大袈裟にしなくても、本当に些細なことでも、子どもたちと、ケアをする過程のなかでいろいろと話し合っていくということは、できることだと思います。ただ、それと、ライフ・ストーリー・ワークというのは別でして、セラピーの形態ということでのライフ・ストーリー・ワークというのが確立されているのです。これは、やはり子どもにもっと踏み込んだ形で深く関わって作業していくわけなのです。子どもによっては、ライフ・ストーリー・ワークのような深いレベルの話をするということ、往々にして自分の母親についての話を、今現在、世話をしてくれている方と話をするのに抵抗があるかもしれないのです。言いたくない、言い辛いことを話さなくてはいけない、そこまで踏み込んだ話を、今、毎日面倒を見てくれている、世話をしてくれている方に話すというのは、非常に難し

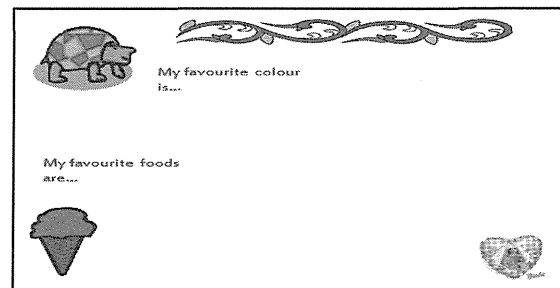
い状況なのです。母親に相反することを言わなくてはいけないという、そういった経験を踏まえると、やはり、外部の方で、そういうセラピストのような役割を果たせる方が、施設外の方が望ましいかと思えます。

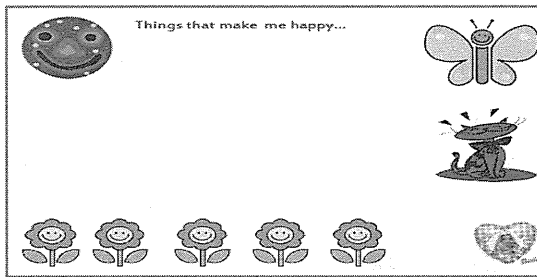


このスライドは、どういう情報が入ってくるかという例ですが、例えば、「自分のお母さんは？」ということで、まず、名前が入りますね。写真があれば、写真。子どもがお母さんの絵を描くこともあると思いますし、子どもが記憶にある内容、どういうことを覚えているのかという内容がここに入ってきます。

父親についても同じものがあります。

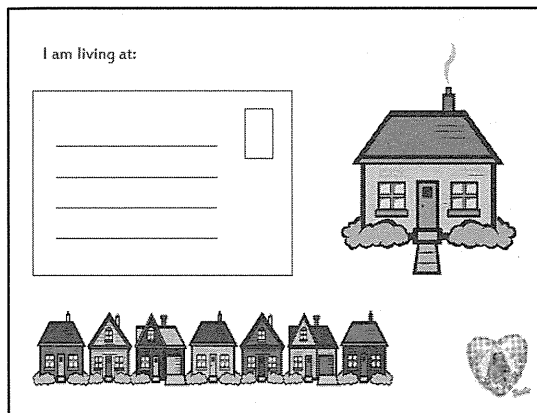
次のスライドは、子どもが何を好きだとか、何をしているときが楽しいのか、というシンプルな問いかけに対する、興味深い、興味を持てるような内容をこちらのほうに書いてもらえばいいのですけれども。





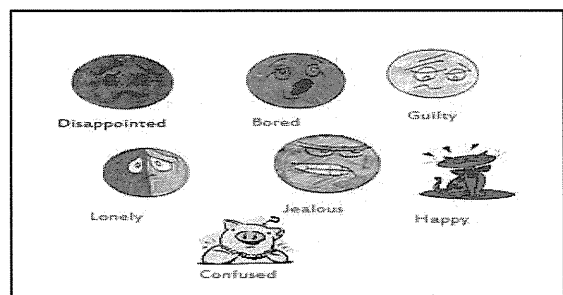
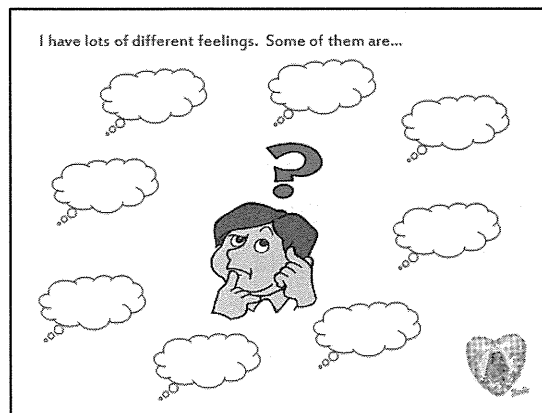
こうしたことは、ときに難しい作業になるかもしれませんが、往々にして楽しめるような作業だと思います。ただ、ライフ・ストーリー・ワークとなると、もっと詳細にわたって、踏み込んだ作業になってきますので、ライフ・ストーリー・ワークを担当する方は、本当に子どもの生い立ちに関しても熟知している必要があります。たとえば、母親について、子どもが語る内容が、現実とかけ離れているものになっている可能性もあります。

この程度の情報であれば、職員の方、若しくはケアをされている方が取り組むことは可能だと思うのですが、更に一步踏み込んだライフ・ストーリー・ワークになりますと、やはり、もっと深いところに入っていきますので、現実と、子どもが描写している内容とに違いがある場合、ギャップをいかに埋めていくことができるのか、そこでサポートするという役割もあります。



こちらは、どんな家に住んでいたのか、

住んでいたのはどういう人だったのか、若しくは兄弟がいたり、祖父母と同居していたかもしれません。Richard Rose という方は、これを自分についての本 (all about me) ということで、自分自身の理解を深めるための本を作り上げるというやり方をとっています。こういうやりとりを通じて、いかにその子どもが自分の生い立ちについて混乱しているのかということが、段々わかってきます。このワーク自体は1年から1年半かかるとは思いますが、ある程度正確な生い立ちの理解をしているかどうか、家族についての成り立ちですとか、そういったところの情報に関しても、どこが欠落している、どこからどこまで正確に理解をしているのかということ把握していくことができます。



こちら、非常にシンプルなやり方で、子どもたちが抱えている感情を表すという手段になりますけれども、言葉で書いても結

構ですし、顔の表情で、悲しそうだったり、怒っていたりということによって表現することもできますけれども、これによって、自らの感情を認識することができるようになっていきますし、非常に、そういう意味では容易なやり方ではあると思います。

こちらに書かれている内容は、子どもたちがいかに安全な場所にいるのかということの思い起こさせてくれるような内容になっておりまして、誰も自分を傷付ける人はいないとか、何か自分が悪いことをしようとすると、ちゃんとそれを大人が止めてくれるというような内容ですね。

今お見せした内容は、ライフ・ストーリー・ワークそのものではなくて、入口にあるところで、ライフ・ストーリー・ワークを始める前の段階で、世話をされている方でもできるアイデアとして、ご紹介しているわけで、前段階として、より今後への理解を深めるものです。本当に子どもにライフ・ストーリー・ワークが必要かどうかを判断するうえでの材料にもなります。

ほかに何かご質問はございますか？

男性：ライフ・ストーリー・ワークについてですが、今のことにも関わって説明をされたのですが、自分自身の理解を深めるためということの入口にあるということですが、それと、先ほどの文書の中に、1年から1年半ぐらいかけて、ライフ・ストーリー・ワークを行っていくということが書かれていますが、僕のいる学園では、子どもが入所理由を知りたいということであれば、職員で確認を取って、この子についてはこの程度伝えようということ、伝えていくということ、卒園までに、その子が望む

のであれば、話をしていこうということ、割と短時間で伝えていくという形を取っているのですが、ライフ・ストーリー・ワークについて、具体的な項目というか、中身のところで、どういったことを伝えていくのか、そのあたり、もう少しお聞きできればと思うのですが。学園では、その子の入所にあたって、子どもは悪くないということ、親の状況もあるのですが、社会に巣立っていくことを考えていくと、親の育った環境とか、そのあたりのことを割と伝えて、親を悪く言わないということ、心掛けて伝えていくようにしています。

トムリンソン：非常に大事なポイントだと思います。子どもの親に関して、あまり判断を下すような、批判的なことは言わないということも重要だと思います。

ライフ・ストーリー・ワークに関して、3つのレベルがありまして、実際に子どもに何が起こったのかという生い立ちの過程の事実ですね。2つ目のレベルというのが、子どもがその事実関係をどのように理解しているのかということ、施設に入所したことはわかっているけれども、どうして入所に至ったのかという理由のところ、現実とは違う理解をしている場合があります。先ほどおっしゃったように、自らを責めているという、自分が悪くて入所に至ったのだと理解している子どももいるかと思います。ライフ・ストーリー・ワークというのは、非常に複雑で時間のかかる作業ではありますが、子どもに対して事実を知ってもらうだけではなく、その事実に至った経緯の中で、どうしてそういう事実が起こって

しまったのかという理由も理解してもらおうということを心掛けておりますし、その事象に対する子ども自身の感情についても、できるだけ理解するように努めています。

まず、健康的に大人として成長してもらうために、事実として何が起こったのかということを知る必要がありますし、その理由についても把握する必要がありますし、それに対する感情ともうまく向き合っていく必要があります。例えば、5歳のときにこういうことが起こって、その理由はこうだったと。それについての理解は正しかったとしても、そのときにどういう感情、どういう気持ちになったのかということについては、語れない子どもが多いですね。「そんなものは気にしない」とか「わからない」とか言ってしまうかもしれないのですが、実際そのときに抱いた感情というのは、当然子どもは気にしているわけです。ただ、それを口に出すことができない、表現することができないということなのですね。

先ほど、手を挙げられていた方、どうぞ。

女性：コミュニケーションのところになるのですが。今現在、担当している子どもの中に、12歳の女の子がいます。11歳まではアメリカで生活をしていたので、言語としては英語を使っていました。今現在は日本にいますので、日本語を習得して、学校生活などを送っているのですが、言葉の壁だとか、日本語の微妙なニュアンスだとか、日本の文化とか、そういったものが、なかなか理解できないので、対人関係のトラブルなどがすごく多いですし、本人自体がかなりひどい虐待を受けてきたこともあって、いろんなことに対して、虚言が多いですし、

うまく伝えられないことでパニックになってしまったりします。あと、自分の非を素直に認められない、そういったことでのトラブルが絶えないので、これから中学生になって思春期に入るということもあって、どういうふうに、こちらも対応したり、支援していったらいいのかというところが日々職員の間で話になるのです。生い立ちの整理はもちろんしてあげなければということもありますし、まずは、その日々コミュニケーションというか、そういうところをうまくできると、彼女自身も生きづらくないのかな、と思うのですが、その辺をアドバイスいただけたらと思います。

トムリンソン：今伺った状況というのは非常に難しい状況だと思います。お子さんも虐待を受けてトラウマを受けている以外にも、外国で生活しなくてはいけないという大変な状況にあるかと思います。これは、違う国に住むのは、大人でも大変なことですから。あと、周囲の馴染みのない環境で、周りの人にも理解してもらいづらい状況と、言語の微妙なニュアンスというのは、確かに先ほどおっしゃったようにあるかと思えますので、様々な難しい状況が絡み合っていると思います。そこまで難しい状況のお子さんの場合は、先ほど私が申し上げたように、サバイバル、まず、そこで位置付けてあげることがひとつの大きな目標になります。また、アメリカから来られたということで、更に問題が複雑化している部分もあるかと思いますが、ひとつの改善策としてご提案したいのは、たとえば、アメリカという馴染みのある文化の方を、アメリカ人の方に関与してもらおうとか、彼女

がよく馴染んでいるルーツに近いところで楽しめるようなことがあれば、それを取り入れてあげるとかですね、そういう改善策も考えられるかと思います。

女性：本人が、アメリカの記憶をなくしたい、アメリカで父からの虐待がひどかったので、忘れたい。できれば、日本でも、このまま両親から離れて生活をしたいと思っているので、英語もしゃべりたがらない。だけど、日本語を一生懸命やるけれども、今すごく難しい。でも、1年でよく習得したなと思うのですけれども。

トムリンソン：今のお話を伺うと、非常にお子さんのことを尊重されて、その子を守るということで、非常に思いやりを持って感情移入させながら、適切な行動を取っておられることがよくわかります。やはり、アメリカと虐待されたという経験が結び付いてしまっているということですので。その状況を、本当に適切に判断されて、うまく対処されているように聞こえます。ライフ・ストーリー・ワークのなかでも、最も重要な点のひとつとして、子どもと日常生活を一緒にするなかでのマイナスの感情とプラスの感情、また、マイナスの経験とプラスの経験というのをうまくバランスを取っていくということもひとつ挙げられます。虐待されていた子どもであっても、たとえば、両親に関して何らかのいい記憶、思い出があるかもしれないと思います。その女の子が、将来本当に自分の安全を感じることができるときには、何かアメリカについて、若しくはアメリカ人についても、いい思い出、記憶がよみがえってくることもあ

るかと思います。

そろそろ終わりの時間が近づいてきたのですが――。

それでは、長い時間、皆さまご清聴いただきまして、ありがとうございました。いろいろな考えを共有いただき、積極的にディスカッションに参加していただいて、本当に意義深い時間を過ごすことができました。3時間の長丁場になりましたけれども、ご参加いただきまして、ありがとうございました。

(拍手)

本当にありがとうございます。来年、もしこちらに伺う機会がありましたら、あと1年、皆さんに survive していただいて、またお目にかかれることを願っております。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。研修は、これで閉めさせていただきますが、午後も滞在していただけるということで、いろいろ企画がありますので、学習室のほうで意見交換等の時間を設けさせていただきたいと思いますので、奮ってご参加ください。会の最後となりますので、調布学園園長遠田より挨拶いただきたいと思います。

遠田：皆さん、今日は、お忙しい時間のなか、午前中3時間という時間を利用していただいて、パトリック・トムリンソン先生の研修をいただきました。まず、始めに、今回2年目になりますけれども、こういうチャンスをいただきました開原先生に感謝をさせていただきたいと思います。また、とてもわかりやすい通訳をしていただきました辻さん、ありがとうございます。(拍手)

私どもも、日々本当にサバイバルでありまして、今の苦労が先の楽しみという思いを日々抱きつつ養育しておりますけれども、本当に今日は多くの関係機関の方々にお見えいただいて、重要な意見交換ができたのではないかと考えています。今日のお話のなかで、本当に生き残ること、長く働き続けることと、その根底を支えるコミュニケーションの重要性ということをとっても共感できる、また、重要なアドバイスとメッセージをいただきました。本当に、いろいろと今日お話を伺えたことにありがたく思っています。

パトリック・トムリンソン先生には、私も英語は下手なので、拍手で感謝を表したいと思います。皆さん、ご一緒をお願いいたします。どうもありがとうございます。

(拍手)

司会：これで会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

《以上終了》



Tomlinson 氏とスタッフの座談会

日時；2013年10月23日（水）14:00~15:30

場所：調布学園学習室

講師：パトリック・トムリンソン氏

出席者：渡邊総括園長・遠田調布学園園長

春日第二調布学園園長・石井主任・若林主任・

杉浦・座安・戸谷・小林・村山・山崎・遠藤・

中西・石川医師・開原

司会：石井主任

通訳：入江（品川景德学園職員）

録音記録編集：岸江美佐・開原久代

石井：打ちあわせが不十分な中ですが、パトリックさんも来日すぐでお疲れと思いますが貴重なお時間をいただいて、先ほどのご講演と昨年のお話を含めて、イギリスの事情などの意見交換ができればと思っております。いかがでしょうか。

トムリンソン：結構です。どうぞ。

石井：よろしくお願ひします。では、皆さんから感想を含めてどうぞ。

遠田：昨年もお聞きしましたが、イギリスでも職員の勤続年数が少ないことを伺い、先ほどの先生のご講演の中でも、働き続けることが大変という中で、イギリスではどのような対策をとっておられるのでしょうか。

トムリンソン：調布学園には60年勤続のスタッフがおられますよね（一同爆笑）、渡邊先生ですか！スタッフが長くとどまるような安定した成功的な機関運営には、よきリーダーと、よきマネージメントチームがあり、よい人たちが協力的に働けるところです。昨年、こちらを訪問した時、皆さんはよいマネージメントチームを持っておられることがよくわかりました。

渡邊：私が質問してよいかですが、昭和49年（1974年）に元職員の小堀君が英国を1カ月訪問しましたが、その当時、6人の子どものグループホームを8人の職員がみていて、そのうち3人は専門スタッフという報告をしてくれました。今、学園のグループホームは6人の子どもに3人のスタッフですが、ま、ボランティアがはいて8人はいるかな？

それで、英国では現在、グループホームのスタッフ配置はどうなっていますか。

トムリンソン：英国では、1ホームに5人の子

どもがいて9~10人のスタッフがいて、昼間3人がいつもいる on duty という配置です。

英国では政府改革で、たえず変化しており、私が最初に働いていた時は、10人の子どもに5人のスタッフ配置で、週60~70時間働いていましたが、今は、政府改革で週40時間以上働くことは許されなくなりました。政府改革がなければ、我々はもっと少ないスタッフでやれるはずでした。5人の子どもに10人のスタッフは多すぎますよ。

春日：パトリックさんが最初に働いておられたコッツワルド・コミュニティは閉鎖されたということですが、そこは被虐待児のグループホームだったのですか？それともふつうの養護施設だったのですか？

トムリンソン：非行少年たちと勿論、被虐待児の施設で、私は14年そこにいました。

渡邊：今、学園で検討中のことですが、別の施設ではすでに実施していることで、グループホームの炊事場スタッフとして近所のおばちゃんに入ってもらうことについてどう思われるかお伺いしたい。いわゆる「おばちゃんスタッフ」です。

トムリンソン：可能であるならば、外から入ってくる人が料理や掃除をするのではなく、子どものケアをしている人がやるべきと思います、ふつうの家庭では、外から人が来て料理をすることはないので、子どもたちは将来親となり家庭をもつので、ケアラーが料理や掃除をするのをみてふつうの家庭のモデルとする必要があります。

さきほどの職員をキープするにはというご質問への補足ですが、どの機関でも何か変革、改革をする時は、マネージャーとスタッフがこまかいことまで話し合うことが大事です。

今のこのような会議が大事ということですよ。

渡邊：米国では、ハーフマザーという仕組みがあつて、資格など問われない人たちで、黒人などが1年中住み込んでいて、資格のある人が昼間通ってくると聞いた時、私は納得できないと思いましたが、その時、英国では保育士の資格のある人が通ってきて、必要なら泊まってくれと聞いていいなと思いました。

皆、労働基準法など守ってられないですよ。週1回しか泊りをやってはいけないなんてことやれないですよ。

で、英国のグループホームの勤務時間は、今

どうなっていますか？

トムリンソン：7時から23時までが勤務時間ですが、法令で週40時間労働となったので、7時から15時まで働いて帰宅し、交代職員は15時から23時まで働いて泊ります。2交代シフトで、夜勤者は必ず2人になっています。以前は1人でしたが政府は2人と法改正しました。

開原：もう一度、職員配置の確認をさせていただきますが、困難な子どもたちの場合は、5~6人の子どもに10人のスタッフ配置で、それほど困難でない場合は、8~10人の子どもに6人のスタッフということでしょうか。

トムリンソン：だいたいそんなところです

渡邊：「すこやか」というショートステイでは、子どもが泊まる時には、たとえ子どもが一人でも職員は2名泊まることになっていると聞きました。

英国と同じ考えかたでしょうか。ウチのグループホームで夜勤を2人にするとしたら大変でしょう。

A：話題を変えますが、午前中のお話では大きく二つありましたが、日課の大切さを伺ったのですが、学習と就労指導のことをまず伺いたい。トムリンソン：教育については、ケアを受けている子どもは逆境の中で過ごし学校から追放されたりしてきたのでまず学校で受け入れ、学習のハンディキャップへの支援が重要です。

高年齢の子には就職のためにスキルをつけるために修理とか機械や電気の仕事、木工などを教えたり、若い子には仕事の経験をさせるためにパートの仕事の経験をさせたりします。

ここで、子どもたちの就労を考えるなら、子どもとどこに問題があって、どうしたら解決できるか、困難なことは何かということをも、話し合うことが大事です。

今、英国では、なんでも政府が決めてきて、政府の干渉がありすぎます。夜勤を2人にすべきということも我々が必要だと要求したのではなく、政府が決めてきたことです。(あとで理由を説明。子どもから夜、職員から虐待されたと偽証された場合に備えて2名必要ということ)ここ、日本では、子どもにとって何が一番大事かということを考えてとりくむべきです。

B：英国ではケアを受ける子どもはそれまでの経緯で能力が低いということですが、また、今

朝の講演は子どもの情緒面の問題が取り上げられていましたが、頭はよいのに学習が遅れている子どもたちへの対応はどうか伺いたい。

トムリンソン：虐待されている子どもには学習の遅れがあり、10歳でも4歳レベルということがあります。そういう子に10歳の教育をすればプレッシャーになるので4歳の教育からはじめて6か月から1年集中して取り組んだら年齢においついたのです。

重い情緒障害のために発達が遅れている子どもを私が2年だけ働いていた施設で担当しましたが、最初に取り組んだことは情緒的ニーズに対応したことにより著しく改善しました。もし、情緒面へのケアを考えなければ回復は期待できない子どもでした。

C：日本では18歳すぎでの自立の問題が大変ですが、英国では施設退所後の問題はいかがでしょうか。

トムリンソン：米国も英国も同じ状況です、多くの子どもは18歳でケアから出されます。英国では21歳までの延長もありますが、適用されることは少なく、多くは18歳でケアから出ます。米国では18歳で里親家庭をでますが、リーヴィング・ケアでホームも家族もなく、ケアから独立への移行は大きな問題となっています。リーヴ・ケアでサポートが受けられなくなるからです。

渡邊：イギリスは兵役の義務があるのですか？

トムリンソン：英国では兵役は18歳からですが、義務ではなく自分で選択できます。

渡邊：英国では、英語をしゃべれない人々がいると思いますが、そういう人たちにはどうやっているのですか？

トムリンソン：英国ではポーランド、ルーマニア、チェコなどヨーロッパの国々からの移民が多くなっており、英語をしゃべれない人々が増えています。

渡邊：そういう子どもたちへの教育はどうしていますか？フランスではアフリカからのお子さんたちに仏語を教えるのが大変と聞きましたし、就労指導も大変ということでしたが、英国ではどうですか？

トムリンソン：私自身はくわしいことは知りませんが、家族が英語を話せない時には通訳をつけるという支援、ポーランド人の親の通訳をつけているという話は聞いています。こうした問題はこの10年の間に増えているのでこれから